

十  
描くこと自体が祈りのようなもの。  
私が描く、私のミューズ(女神)。  
それは暗闇に差し込む  
ひと筋の光でもあるのです。



る天草自体の素質として、  
どんなものがあつたのか。  
天草四郎を描くうえで、  
ずっとそんなことを考えて  
いました。重税に苦しむな  
かで、救いを求めるような  
気持ちでキリスト教にす  
がった人も多かったように  
思います」。

漠然とした不安の中で、  
ひと筋の光を求めるような  
感覚。それは、鶴田さんに

とつてのミューズ(女神)  
にも重なります。

私の描く美人画は、  
女性を神格化したものです。

「広告やイラストの仕事に  
忙殺されていた若い頃、自  
分を見失いたくない。救わ  
れたい」という一心で作画  
に取り組み、生まれたのが  
この美人画。だから私は、  
「ミューズ(女神)」と呼ん

でいます。私にとって、描  
くこと自体が祈りのような  
ものでもあるのです。だか  
らこそ、今回の表紙のイラ  
ストでは、可愛らしさや優  
しさを大切にしました。天  
草のキリシタン史には弾圧  
や潜伏という、暗い時代も  
ありますが、信仰の中で光  
明を見出した彼女たちには  
さっとこういふ瞬間があつ  
たと思うのです」。

画家・鶴田一郎と歩く  
キリシタンの里・崎津

画家・イラストレーター  
の鶴田 一郎さんは天草市本  
波に生まれ、美人画の作家  
として知られるほか、20  
05年に「天草四郎と祈り  
」というタイトルの原画  
作品を発表。近年は仏画や  
琳派といった日本の伝統美  
に魅了され、鶴田琳派と  
いう新たな世界観を探索  
しています。

今回鶴田さんには、この  
『天草のキリスト教関連遺  
産ガイドブック』の表紙  
アートを依頼。制作にあた  
り、2018年の世界遺産  
登録を目指す「天草の崎津  
集落」を散策していただき  
ました。(2016年11月当時)

当時の人たちはなにゆえ、  
キリスト教を信じたのか。

天草四郎をモチーフとし  
た原画作品の構想を練る際  
に、天草のキリシタン史に  
ついて学んだといい、当時  
を振り返ってこう語ります。

「天草にキリシタンの歴史  
があるということは知って  
いるつもりだったのです  
が、繁栄期には島民の8割  
以上がキリシタンだったと  
聞いたときには驚きまし  
た。キリスト教を受け入れ

復活の象徴としての、光。

彼らがキリスト教に感じ  
た希望は決して、消え行く  
ものではなかったはずだ。  
そんな思いもあつたので  
しよう。鶴田さんの描いた  
表紙のイラストには、復活  
の象徴として、力強い光が  
描かれています。



画家・イラストレーター  
鶴田 一郎

1954年、熊本県  
本渡市(現・天草  
市)生まれ。彼の描  
き出す美人画は、ま  
さにアールデコの  
ヨーロッパ的要素  
と自分の中の日本



的なものが見事に融合し、  
たおやかで華やかな世界  
を創りあげる。  
1987年には、ノエビア化  
粧品の広告に抜擢され、  
CMアートの先駆者として  
人気を博し、彼の作品の中  
の女性たちは、今も多く  
の人々を魅了し続けている。

[ホームページ]  
<http://www.tsuruta-bijinga.com>

